



## 香港便り その28

### 香

港の中心地には超高層ビルが立ち並び、それらをつなぐようにプロムナードが設置されている。地下鉄の駅でいうと3駅分くらいは一度も地上に降りることなく香港島を横断できる。平日は高層ビルのオフィスに入った金融機関などのエリートビジネスパーソンたちがスーツを着てコーヒを片手に急いでいる場所なのだが、日曜日になるとその光景が一転する。東南アジア系の女性たちが段ボールを敷いてピクニックをしたり、カラオケ大会を始めたり、大変賑やかになるのだ。

彼女らはドメスティック・ワーカー、いわゆるヘルパーとして雇われ、フィリピンやインドネシアなどから出稼ぎにきた女性たちだ。敬虔なキリスト教徒が多いフィリピン人はセントラル地区、ムスリムのインドネシア人はコズウェイベイ地区に、それぞれ同郷の友人たちと日曜日を過ごすために香港中から集まっている。

香港の中流家庭は共働きカップルがほとんどだ。香港の高い物価や教育費、不動産などを賄うために2人がフルタイムで働く。お互いの仕事を減らし

### 日曜日の憂さ晴らし

ながら2人で家事を分担しつつ、2人とも働くヨーロッパのスタイルとはまた違うが、それでも香港における女性の社会進出度は日本に比べると高く、社会的地位の高い女性もよく見かける。そこで家庭内労働力を補うのが東南アジアから来たヘルパーたちなのだ。香港の一般的な間取りには2畳程度の極小のヘルパールームが設置されていて、彼女たちは日曜日以外の週6日、住み込みで掃除、洗濯、子供の送り迎えから、犬の散歩、そして食事の準備などあらゆることをこなす。家庭を持つ日本人のキャリアアウーマンたちは、ヘルパーを雇ってから劇的に生活が豊かになったと口を揃えて言う。日本にいた頃はキャリアと家事、家族の世話に追われていたが、香港では家事を外注することで仕事と家族とのクオリティタイムに時間を割けるようになったようだ。

香港の経済を支えているといってもよいヘルパー制度だが、問題も多くある。彼女たちの月給はおよそ10万円で、住み込みで食事付きとはいえず、労働時間に見合った給料ではない。ビザスポンサー（ヘルパーのビザの保証人である個人雇用主）以外からの仕事を受け

ることができず永遠に給料が上がらない。さらに、香港では通常7年間継続して有効なビザを持っていると永住権とパスポートを取得できるのだが、ドメスティック・ワーカービザは毎年更新しなければならぬので何年働こうがカウントされず、永遠に取得できない。

日曜日のカラオケ大会は同じ悩みを持つ友人たちとストレスを発散できる唯一の場所なのである。ヘルパーは女性の社会進出を促すカンフル剤なのか、はたまた現代の奴隷制なのか。社会の構造的変化が起きない限り、永遠に付きまとう問題であろう。

#### Profile

2011年にロシアの名門ワゴワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。ヨーロッパ、北米、日本を含めさまざまな劇場における公演で主役を務めた。そして2021年7月より香港バレエ団に活動の拠点を移し、さらに活躍の場を広げている。立教大学中退。

文 高野 陽年

text by Yonen Takano

